載せたお話しを読んだのがキッカケでした。

その後、陸前高田市の吉田大肝入文書宝歴二年定留八十四番の解読書を読んで史実だったことを知りますます興味が湧いてきました。

口説きは、上の句七七と下の句七七の順に節まわしが二種類交互に繰り返しになっています。

約一時間かかる長いものですが、一部をご紹介します。

題名「女川飯田口説き」

「ハアー
色は思案の外とは云えど
昔故実を　尋ねて見れば
鳥の教えし　妹背の道よ
内裏上臈も御公家も武家も
恋は誠の　道とは定め
仁義五常も　恋より起こる
色で丸めし　世の中なれば
色と恋とは是非無きものよ
高き賤しい　上下はなきよ
故を如何にと尋ねて聞くに
国は奥州　桃生の郡
村を申せば　北女川よ
四十五貫の　御知行取りで
飯田能登とて　名高き人よ
お家一族　座敷は二番
当時御役は　御申次よ
今度御奉公で　仙台詰めよ
兼ねて能登様　深色好きで
奉公務めは気詰めとありて
病気つくりてお願い上げて
急ぎ女川　在郷なさる
在郷屋敷で　我侭なさる
表露地に　色有る花よ
つつじ椿や　八重山吹よ
青木南天　三階小松
梅よ桜よ　紅葉に伊吹
牡丹芍薬　桔梗に葵
菊は種々　鶏頭の花よ
右手は鷹部屋左手は池よ
池の中には　金魚や小鮒
扨ては鯉鮒　きっ甲亀よ
鶴や白鳥　朝鮮雉よ
それに限らず小鳥は数多
放し置かれて慰みなさる
内の寵愛おりえにおつよ
（他の文献・お蝶もあり）
おりえ十六おつよは十九
花の如くに化粧をさせて
左手右手（ゆんで、めて）
より歌わせ舞わせ
それも栄華の不足とありて
下の家中の　娘や嫁を
みめが良ければ　屋敷に上げて
杓を取らせて　唄酒盛りよ
余り栄華の　過ぎたる故に
今度お家に　大事が御座る
内の奥様　お節と云うて
年は廿十二で　今咲く花よ
いらぬ花よと振り捨てられて　無念涙で月日を送る
能登の家中の　御用人役に
苗字日藤　名は喜右エ門よ
年は廿十九で　器量よき男
而も喜右エ門御茶の間御番
茶の間座敷は喜右エ門一人
そこで奥様　心を寄せて
茶の間の障子を　さらりと開けて
見れば恋しき喜右エ門一人
猶も奥様　飛び立ばかり
金の屏風に　立寄りかかり
顔に袖あて　小声になりて
何と喜右エ門　徒然じゃない
いか　そこで喜右エ門
うろたえ顔で
頭ぺ地に付け　こは奥様よ
私は御奉公で是非なきものよ　あなた徒然は益々可と
云えば奥様　座敷へ座り
火取引寄せお煙草あがり
四方の話を　暫くなさる
そこで奥様　申さる様は
如何に喜右エ門よう聞き給え　私は深山の繁みの桜
さては野に咲く主無き花よ
いらぬ花よと振り捨てられて
無念ながらも　月日を送る
花を欲しくば　一枝折られ
そこで喜右エ門申さる様は
花を欲しさは限りはないが
梢高くて　折られはせまい
そこで奥様　申さる様は
扨ても愚かや喜右エ門殿よ
梢高くば　登りて折られ
雪と氷は　隔てがあれど
解けて流るる　谷川水よ
梅と桜は　隔てがあれど
散りて落ちれば　木の根に帰る
月と水とは　映りが早い
時を移せば　流るる水よ
忘れ給うな喜右エ門殿よ
心残して　お帰りなさる
それが恋路の種とやなりて
文や玉章　折り紙などを
送り送られ　妹背の仲よ…

こうして始まった二人の恋が、後生に伝わる大事件に発展してまいります。

平成二十年 年回表

一周忌	平成十九年歿
三回忌	平成十八年歿
七回忌	平成十四年歿
十三回忌	平成八年歿
十七回忌	平成四年歿
廿三回忌	昭和六十一年歿
廿七回忌	昭和五十七年歿
卅三回忌	昭和五十一年歿
卅七回忌	昭和四十七年歿
五十回忌	昭和三十四年歿